

銀杏

発行所

〒792-0835
新居浜市山根町8番1号
曹洞宗瑞應寺専門僧堂
編集発行人 村上 徳 存
電話(0897)41-6563
FAX(0897)40-3127

毎月1日発行
(振替 01330-2-31918)
瑞應寺
印刷所 東田印刷株式会社

へきがんろくものがたりどくご 碧巖録物語独語【四】

— つねに心の平和を願い —

後堂 門 原 信 典

この原稿を書いている今、ロシ

アがウクライナへの侵攻を始め、信じられない悲惨な状況が連日報道されています。この銀杏誌が皆様のお手元に届く頃には、和平への道筋が開かれている事を祈るばかりです。しかし、攻撃が終わったとしても、失われた多くの生命も、破壊されたものは、もう二度と帰っては来ません。

アフリカのサバンナの森から出て、草原を二足で歩き出したのが人類一号の誕生だそうです。それから七百万年かけて進化したと言われていますが、一体何が進化したのでしょうか？人類は有史以来、凝りもせずと同じ事を繰り返すばかりです。

【モンゴル帝国】

曹洞宗では、「碧巖録」と並んで、禅門の二大聖典と云われる「従容録」を二月からの提唱講義に於いて参究していますが、その「従容録」が編集された時代は、チンギスハンがモンゴル帝国を築き、中国から西域に侵攻する時代です。その時の様相は、ジュワイニーという人の「世界征服者の歴史」に「彼らは来た、破壊した、焼いた、殺した、奪った、そして去った」とあり、この短い文章で言い尽くしているそうです。

モンゴル帝国は、西は東ヨーロッパ・トルコシリア、南はアフガニスタン・チベット・ミャンマー。東は中国・朝鮮半島まで及び、アジアとヨーロッパを横断し、地球上の陸地の約十七%を統治、当時の人口は一億人を超えていたそうです。

【耶律楚材（二九〇～一二四四）】

ところで中国では「唐」が滅んだ後に、耶律阿保機（八七二～九二六）が現れ、「遼王朝（九一六～一二二五）」を建国し、その支配圏は実に北京を含む十六州に及びます。これから御紹介する耶律楚材はその八代目の末裔です。その「遼」も「金王朝（一一一五～一二三四）」に滅ぼされました。「金」は中国の北半分を支配する事になったのですが、狩猟生活を中心に送っていた為に、行政に通じている人材はほとんどいなかった。そこで、滅ぼした「遼」の国の人材を重臣として採用しました。

それが「遼」建国の祖、耶律阿保機から七代目、耶律楚材の父、耶律履と云う人です。

太祖十年（一二二五年）に「金」の首都北京はチンギスハン率いる蒙古軍に制圧されます。耶律履の息子であった耶律楚材は、元々非常に優秀な人で、「金」の国の進士という試験に主席で合格、将来の閣僚候補、宰相候補でした。

そして耶律楚材は蒙古軍の捕虜になりますが、チンギスハンは、その耶律楚材の才能と名声を惜しんで政治顧問とします。

この耶律楚材を主人公にした『耶律楚材』という陳舜臣さんの小説があります。

その小説の中では、蒙古軍は憐れみの心など一切持たず、攻め滅ぼした所は、原野に死体が累々と横たわり、鬣髯が積み上げられ、草一本も生えない地獄のような有様になるといわれていました。チンギスハンの信任を得た耶律楚材は、その蒙古軍の凶暴さを少しでも自分の力で和らげる事が出来たらと、無謀な殺戮と略奪を止めさせる為の懷柔策を打ち出していったとあります。

【万松行秀禪師（二六六～一二四六）】

実は、耶律楚材は、政情不安定な北京にあつて、中国曹洞禅の流れをくむ万松行秀禪師に昼夜を問わず、寝食を忘れ、三年間専一に参禅、湛然居士（徒源）という安名をいただかれています。

この連載の二回目にも紹介した、曹洞宗の坐禅を的確にあらわされた宏智禪師（二〇九～一一五七）の示された頌（漢詩）百編があります。耶律楚材は、やがてチンギスハンに同行して、北京から遠く離れた西域に赴くことになりましたが、その宏智禪師の頌の講義録を万松禪師に懇願、実に九回も手紙を送り、何と七年間待ち続けます。その時代、環境に在っては気の遠くなるようなお話です。そしてつい

に万松禪師の講義録が耶律楚材に届きます。それが「従容録」です。序文にはその喜びを次のように表しています。

「忽ち是の書を受く。酔うて醒むるが如く、死して甦るが如し。踴躍歡呼して東に望んで稽顙し再四披繹して巻を撫して歎じて曰く、万松西域に来れるかと。」

『ここにようやくこの「従容録」が届いた。酔いから醒めたようだ、屍同然だった私は甦った。喜び勇んで躍り上がり、大声で嬉しさを表現した。そして万松禪師様が居られる東の方向に向つて、頭を地に付けて深々と礼拝した。再三再四、本を読んでは撫で「万松禪師様がこの地に来て下さったようだ。」素晴らしいことだ、と感謝した』

如何に立派な志を持つていても、常に導いてくださる師匠、そして同行の士が無ければ道に迷う。それでも道心（仏道修行を求める心）を保ち続けた耶律楚材は素晴らしい人でした。

耶律楚材は「自分が如何に生きるか」だけを求めているのではなく「同じ苦しみを受けている人たちを、いかにして救うか」を自分自身の生き方にしていたと小説にはありました。

【迷いや苦しみの中で】

私自身、振り返れば、迷いや葛藤に振り回される弱い自分をよく知っています。

はたして地獄、餓鬼、畜生そして修羅という争いの世界の中にあって「衆生無辺誓願度」全ての生きとし生けるものを救うのだという誓願を持ち、実践出来るか？否、今ここで、自分の身心に誓願をいだいているか？

耶律楚材がチンギスハンの西域遠征に同行し、無間地獄の世界を目の当たりにしながらも、万松禪師様に、そして『従容録』つまり曹洞宗の坐禅に救いを、生き方を求められた。この道心が無ければ『従容録』は生まれなかったのです。今、改めてこの事を思います時、何時でも、どこにあつても、何があつても、思い通りに成らぬ、この無常の現実の世界が、「今こそ坐禅に向かえ」と、常に私の道心に語りかけているのです。

何故ならばお釈迦様の坐禅に、佛祖方の坐禅に、そして道心ある方の草屋の坐禅に私共は救われているからです。

【南無地獄大菩薩

―地獄から逃げるな―

臨済宗中興の祖と云われる白

隠禅師の「南無地獄大菩薩」と

いうお示しがあります。臨済宗南禅寺の管長柴山全慶老師の著書『人生禅話』の中に『地獄は、避けようとするればするほど、盛大となる、ならば、この逃げてしまいたい地獄こそ、そのまま南無とよりどころとし、大菩薩と合掌礼拝したら一体どういふことになるのだろうか。

逃げられるような地獄なら、それはまだ本当の地獄ではない、地獄というものは絶対に逃げられないのだ、逃げられないのなら、どこまでもその地獄を背負っていく他はない。背負うのなら、「南無地獄大菩薩」有り難いご縁だ、とことんまで一緒に参りましょうと腹を据えるほかはない。そうだ、地獄の中で、自分の能力の限りを尽くして死ぬまでやるのだ。』との説示を読ませていただきました。

私は、いつも自分の事で精いっぱい。しかし、そこから出発出来るかどうか。腹をくくる。覚悟を決める。悪あがきを止める。そして、自己満足ではない、誓願が現れた信仰の坐禅が出来るか。

【常楽我浄

―常に心の平和を願い―

阪神淡路大震災、東日本大震災、多くの自然災害。今のロシ

アのウクライナ侵攻。そして様々な理不尽な事件事故は世界中に無辺に起こります。また私の知人も、現実に生きる事の辛さ悲しさを抱え、それでも生きようとしていています。

数年前にもこの銀杏誌に載せていただきましたが、仏教保育、児童教育の先駆者でありました竹内道説老師の十句観音経抄意訳を改めてご紹介いたします。

「楽」には「願う、望む」と云う意味があります。

『十句観音経』

観世音 南無佛 与佛有因

与佛有縁 仏法僧縁

常楽我浄

朝念観世音 暮念観世音

念々従心起 念々不離心

『南無観世音菩薩様

私はみほとけ様に帰依し奉りますみほとけ様にゆかりのあるものすべてに帰依し奉ります

常に心の平和を願い朝にも夕べにも

菩薩様を念じ奉り大悲の心を受けて

み心のままに

生きまつらんと念じ奉ります』

(続く)

テレホン法話 (〇八九七) 四一〇〇三三

禅のたより



洗心

美しい人や景色や芸術を目にしたり、耳にした時、心が洗われるようだと言われは言います。たしか、今ぐらゐの時季だつたと思います。その頃私は二十代前半、札幌のお寺でお坊さんとしての勉強をさせていただいたておりました。

ある日のこと、私がお寺での用事を終えて下宿に帰ろうとすると、お寺の三男、康仁さんが「隆弘さん終わりしよ。スキーに行こう」と誘ってきました。「えっ今からですか？明日もお参りがありますよ」と言うのと「隆弘さん、迷った時は行こう。スキー道具持つてる？無くて借りればいいか。着替えてお寺に集合ね」と、私の返事も待たずに事が決まり、「せっつかくだから、滑りやすいところに行こうか」と高速に乗り、一路小樽へと向かいます。スキーの経験などほとんどないのに、えらいことになったぞと思っているうちに、山奥のスキー場に着きました。

すぐに山頂まで連れていかれ、康仁さんは「下で待ってるね」と格好よく滑っていきます。あとに残された私は、恐る恐る斜面を見ます。目の前に広がる真っ白な世界は空気が張り詰めていて、寒さと緊張が私をおそい、思わず目を閉じてしまいました。しかし、この斜面を降りなければ帰れません。意を決して目を開けると、平日の夜のスキー場は人影も少なく、街の明かりが遠くに見えて、壮大な風景がとて幻想的で、心が洗われるような思いがしました。冬が来ると、あのような風景をよく思い出します。

禅語には洗心という言葉があります。心を洗うという意味です。心を洗うとは、悩みや妬みや怒りなどの心の塵を洗い流すことです。

人は知識や経験を重ねるほど効率性を重視し、時間をどう上手く使うかを考えてしまいがちです。時間を使っているように見えて、実は時間に使われてしまっているように感じます。世俗の喧騒を忘れさせるよう

な風景があります。現代社会を生きねばならない人にとつては、そういう特別な風景を見る機会を作ることは難しいかもしれませんが、ちょっとしたことで良いのです。庭に咲いている花を見てみよう。草むらにいる虫を見てみよう。今日は車でなく歩いてみよう。近くのお寺や神社をお参りすることでも結構です。

少しだけ日常をはなれてみて下さい。日常と違う風景に気づくことができれば、明日からまた頑張ろうという気持ちが出てきます。多分、あとき康仁さんはそのことを私に気づいてほしかった、そんな気がいたします。

愛媛県晴光院 曾根隆弘師
令和四年二月十一日～二十日

◆他は是れ吾にあらず

知人が私の法話を聞いたらしく「曾根さんの法話って、法話集みたいなものがあるんですか？」と聞いてきました。私は、あ、その方法があったかと思いつながら、「ちゃんと原稿を書いてますよ」と答えました。本に書いてあることを覚えてそのまま話すなどということは、考えたことがありませんでした。そこで、ものは試しと法話の

本を広げ、これはいい話だなと思つたものを、そのまま家族に話してみました。

話しながらも何か違和感がありました。「どうだった？」と尋ねると、「普通じゃない？それ、本に載っている話でしょ。話し方に自信がなさそうだったし、そのまま本の話を読んでもね。自分の事としてもう少し工夫が必要なんじゃない」と、言われてしまいました。

「短くても失敗してもいいからあなたの話が聞きたい。お釈迦さまの教えをどう解釈し、どう伝えたいかあなたの言葉で話して欲しい。」そんな気持ちで伝わってきた、なんだか恥ずかしくなりました。

違和感の正体はこれだったのです。他人の話では描写も経験もなく、ただ文字を読んでいるだけの状態です。自信がない話、自分が納得しない話をして、そこには感動も共感も生まれてこないことに気が付いたので。どんなに良い話、有り難い話だとしても、借り物は借り物でしかありません。参考にはできますが、話のどこかにほころびが生まれるのです。逆をいえば、私の話は私にしかできないということなのです。

永平寺を開かれました道元禪師さまの書かれた典座教訓の中に「他は是れ吾にあらず（たはこれわれにあらず）」という言葉があります。実践するのは他人ではなく、自分自身であり、自らが経験して学ばなければ意味がないと示されています。

家族であつても、親の人生は親の人生であり、子どもの人生は子どもの人生です。憧れの人がいたら、その人のようになりたいたい、と目標にすることはできますが、その人にはなれない現実があり、その人と同じ立場にはなれても、自分は自分です。自分の人生は、自分自身で歩むもので、誰も代わってくれるものではないです。

私たちは、不遇な環境を嘆いたり、できないことを誰かのせいにしてたり、不満ばかりを募らせる時があります。しかしどんな言い訳や愚痴を重ねてみても、他人が解決してくれるわけではありません。

まずは、今、自分に出来ることを精一杯やってみる。自分を信じて行動してみる。自分で考え、自分で行動する生き方にこそ経験と成長があり、満足のいく答えがあるのではないのでしょうか？

「他は是れ吾にあらず」皆さんは

自分の生き方ができていますか？

愛媛県晴光院 曾根隆弘師
令和四年二月十一日～二十八日

◆色即是空

三月に入り、もうすぐ春のお彼岸となります。みなさまお彼岸といえ、お経をお唱えすること多いかと存じます。日本でよくお唱えされているお経は『般若心経』だと思いますが、その『般若心経』に出てくる有名な言葉「色即是空」の意味をご存知でしょうか。

「色（しき）」というのは、色（いろ）と書きますが、色彩だけではなく、形も意味しており、物質のことを表しています。つまり、もののことです。そして「空（くう）」というのは、独立しては存在していない、ということの意味です。言い換えれば、何かと関係して存在しているということなのです。

すなわち「色即是空」とは、何であれ存在している全てのものは、それ自体だけで独立して存在しているのではなく、必ず何らかのものと関係して存在している、ということの意味です。

此の世のどのようなものであつても、何かと関係して存在

しており、それだけが独立して存在しているものなどありません。たとえば、花は種子をはじめとして太陽や水、養分などの様々な原因から存在しており、花それ自体が独立して存在しているわけではありません。

此の世のあらゆるものは、何かと関係し、支えられて存在しているのです。それは人間にも当てはまります。普段、私達は自分が自分の力だけで生きていると過信してしまいがちです。しかし振り返ってよくよく考えてみますと、私達は数え切れないほどの多くの縁に生かされていることがわかります。どんなに強く立派な人であっても、その人の力だけで存在しているなどという人はいません。

多忙な毎日を生きておりますと様々な縁に生かされて生きているということをついつい忘れてしまつものですが、一日に一度は仏壇の前に坐り、できれば『般若心経』をお唱えし、親や祖先、神仏をはじめとした様々な見えないもののお陰で私達は生かされているのだということを思い返し、謙虚な気持ちで感謝の日送りをしたいものです。

瑞應寺専門僧堂知庫 村上徳樹
令和四年三月一日～十日



白眉殿進捗状況

写真の通り工事が進んでおります。



■常楽会(おねはん)

三月十五日(火)、三カ年までの新亡精霊を供養する毎年恒例の行持、常楽会(おねはん)が行われた。新型コロナウイルスの感染予防を行いながら、山主導師のもと山内一同、釈尊涅槃会法要を厳修。続いて読立供養。

■萬霊塔供養

三月廿一日(月)、当山西墓地の永代供養塔「萬霊塔」での法要が行われた。山主導師のもと、参列者と共に供養塔周囲を行道、諷経し諸精霊を供養。

■幼稚園卒園式

三月十七日(木)はひかり幼稚園の第六十九回卒園式が行われた。

年明け続々と受付に来られた御遺族様方からは、冥福を祈る多くの気持ちを預かりした。

三月の日鑑

一日 祝祷
十五日 祝祷
常楽会(おねはん)
略布薩
十八日 観音講・勉強会
廿一日 萬霊塔永代墓供養
廿一日 略布薩

銀杏感謝録

愛媛県 丹勝登美 殿
愛媛県 薦田富司 殿
愛媛県 森井孝和 殿
長崎県 皓台寺 殿
愛媛県 森實陸郎 殿
長野県 村上泰助 殿
静岡県 明香寺 殿
愛媛県 陽春院 殿
愛媛県 網干一義 殿
山口県 吉祥寺 殿
愛媛県 小野邦子 殿
愛媛県 品川博子 殿
愛媛県 正法寺 殿
京都府 株式会社谷口 殿
法衣仏具店殿
岡山県 野林百登美殿
愛媛県 越智俊之 殿
福岡県 古賀和子 殿
愛媛県 土岐敏勝 殿
愛媛県 神野征子 殿
島根県 清光院 殿
広島県 光福寺 殿
愛媛県 村尾勉久 殿

(令和四年一月十八日受付迄)

四月の予定

一日 祝祷
五日 参玄会(七日迄)
八日 釈尊降誕会
九日 前夜祭
十日 春季金毘羅大祭
十五日 祝祷・略布薩
十八日 観音講・勉強会
廿日 略布薩



鐘 声

一年前、不安と希望に満ち溢れて参道を上がり、瑞應寺に上山、入堂した。「諸行無常」と言われるように、同じ参道を今歩いてみても、一年前とは違った印象を受ける。

思っていた修行生活とは異なる事が多々あるが、思い通りにいかないのも又、修行なのだからと思わされる。

一通り年間行事を経験したが、これからは古参として、新到を教えながらの修行となる。自分のことだけではなく、周りを見る広い視野での行動が大切となる。頭では分かっているけど、実践してみるとなかなかできないものである。

今一度、自分の一挙手一投足を振り返り、初心に返り修行に励んでいこうと思う。

堂行寮 慧岳